

<<ポスター発表>>  
【24号館1階ラウンジ】

(3月15日 10:30-11:45)

## ブラジル人日本語学習者による不同意の特徴

堤 涼子, 岡崎 渉

本研究では、ブラジル人日本語学習者の会話における不同意行動を調査した。データには、日本語母語場面、学習者母語場面、接触場面での友人間二者間の話し合い会話を用いた。全体の傾向を意味公式に従い分類、比較した上で、各意味公式における<sup>3</sup>者の差異を詳細に分析したところ、日本人は自分の意見を表明することで不同意を間接的に指標する傾向にあること、学習者は日本人と比べ、比較的直接的な不同意を行うこと、フロアを長く保持すること、あいづち、情報要求が少ないといった傾向が観察された。これらの学習者に観察された特徴から、日本人は友人同士の話し合いの場を、可能な限り協調を目指す場として、学習者は率直な意見を表明する対立の場として理解していることが示唆された。本研究は、学習者の不同意行動を中心に、それが場のフレームという全体の文脈とどう関連付けられるのかという視点から論じた。

<<ポスター発表>>  
【24号館1階ラウンジ】

(3月15日 10:30-11:45)

授受補助動詞テクダサルとテイタダクの意味の異なり  
—与え手に感謝を述べる場合—

京野 千穂

感謝を述べる際、「教えていただき／くださり有難うございます」と、テイタダク或いはテクダサルが用いられる。本研究は二つの異なりを、目上の人物にお礼のメールを書くという課題を参加者に与え考察した。その結果、テクダサルは与え手自らの行為であったか、話者の恩恵に対する意外性が伴うことが分かった。また、テイタダクは社会的距離を意識した場合に使用が増すが、年下に対してはテイタダクが減少した。テイタダクは与え手との距離を主に示すのに対し、テクダサルは話者の恩恵に対する感情や与え手自らの行為であることを表す。この異なりは、主語が与え手か受け手かによるものと分析した。テイタダクは主語が受け手となり、与え手を動作主として言及しないことにより、Goffman(1967/1972)による「回避的儀礼」を表すものと捉えた。近年のテイタダクの増加傾向は人と距離をとる傾向と関連があり得る。

<<ポスター発表>>  
【24号館1階ラウンジ】

(3月15日 10:30-11:45)

## 漢字連続長が文章の読みやすさに及ぼす影響

杉山 美智子, 小田 浩一

### 【目的】

本研究では読みやすい文章の特徴を明らかにするため漢字連続長の影響を検討する。読みやすさの指標には音読時の読書速度を用い、実験参加者の内観報告も参考にする。

### 【方法】

公文書から100文字程度の文章を抽出し、漢字連続長の長い群・中位の群・短い群でそれぞれ15刺激を作成した。これらを実験参加者に出来るだけ早く正確に音読させ、読速度を計測した。

その後内観報告も行った。読み時間と正読モーラ数から読速度を出し漢字連続長を要因とし回帰分析した。参加者は女子大生3名であった。

### 【結果・考察】

回帰分析の結果、漢字連続長による説明モデルは $p=0.069$ と有意傾向で、標準化係数は $-0.274$ 、全体で読速度の分散の5% ( $R^2$ 自乗) を説明した。内観報告では漢字連続長の長い文章が読みにくいと評価を得た。

以上の事から漢字連続長が長い場合は、間に助詞や句読点を挿入し連続長を減らす事で読みやすい文章が作成できる可能性が支持された。

<<ポスター発表>>  
【24号館1階ラウンジ】

(3月15日 10:30-11:45)

自閉症スペクトラムをもつ人との会話の協調  
—初対面会話のフレーム分析を通して—

合崎 京子

本研究の目的は、会話における言語使用の不適切さを指摘されることの多い自閉症スペクトラムを持つ人と、それを持たない人の初対面会話を事例として取り上げ、談話分析を行うことによりそのコミュニケーションの実態の一端を明らかにすることである。分析にあたっては両者がその会話にどのような前提 (frame) を持ち、立ち位置 (footing) を展開したかという点に着目した。また、会話が行われた時の状況及び、会話参与者への回顧インタビューのコメントも交え、その相互行為のプロセスを考察した。以上の分析・考察に基づき、談話分析の手法を用いた会話の分析が自閉症スペクトラムを持つ者のコミュニケーション齟齬を解明するのにも有効であることを示し、こうした分野での研究促進の一助としたい。

<<ポスター発表>> (3月15日 10:30-11:45)  
【24号館1階ラウンジ】

中国人留学生の無料通話アプリケーションに見られる日本語  
—スマートフォンでのWeChatとLINEに焦点をあてて—

佐々木 泰子

社会のグローバル化が進んだ現在、日本人に限らず、様々な人々が日本語を使った言語実践を行っている。本研究では、日本における留学生数の最も多い中国人留学生がスマートフォンで無料通話アプリケーションのWeChat及びLINEを使った中国語をベースにしたやり取りに見られる日本語についての出現位置、出現する日本語の種類及び機能の観点から分析を行った。その結果、出現位置については一発話中に単語レベルで、また発話間にも見られた。日本語の種類については、名詞類が最も多く次いで副詞類が多く句や文レベルでは感謝やわび、挨拶などが見られた。これらから本研究では、個人の言語レパートリー(Garcia & Li 2014)、あるいは「メトロリンガリズム」(Otsuji & Pennycook 2010)の立場から留学生の日本語使用を理解することの重要性を指摘した。

<<ポスター発表>> (3月15日 10:30-11:45)

【24号館1階ラウンジ】

中国人日本語学習者は親しい友人間における「配慮」をどのように捉えているか

山本 裕子, 王 源, 本間 妙

本研究は中国語を母語とする日本語学習者が日本語での言語行動においてどのような発話を「配慮」のあるものと捉えているか、母語での言語行動の違いを踏まえその一端を明らかにすることを試みたものである。日本語教育であまり注意が払われてきていないが、親しい友人に対して配慮が必要な場面での言語行動を学習者はどのように捉えているか、「断り」場面を対象とした質問紙調査を通して示した。親しい友人からの「申し出」「助言」「勧誘」「依頼」という4つ発話行為に対する「断り」をどのように行うか4つの場面を設定して調査した。得られた学習者の回答を、中国人母語話者、日本語母語話者の回答と比較しながら分析を行い、学習者は「丁寧に断る」と「配慮する」ことを混同している可能性があり、親しい友人に対する配慮を適切に捉えられていないことを示した。

<<ポスター発表>>  
【24号館2階ホワイエ】

(3月15日 10:30-11:45)

対人関係におけるほめ内容尺度・ほめ機能尺度の作成

澤口 右京・渋谷 昌三

本研究の目的は、何をほめたかを測る「ほめ内容尺度」と、どのような機能をもつほめを行ったかを測る「ほめ機能尺度」を作成することであった。まず研究<sup>1</sup>では、大学生を対象に、同性の友達関係において、何をほめたか、ほめられたかの調査を行った。その結果、1.身体的外見, 2.服飾・所有物, 3.行動・しぐさ, 4.性格, 5.技術・能力, 6.その他に分類された。次に研究<sup>2</sup>では、研究<sup>1</sup>の結果と先行研究をもとに、ほめ内容尺度の項目を作成した。ほめ機能尺度の項目は先行研究をもとに研究者が作成した。大学生を対象とし尺度に回答をもとめた結果、ほめ内容尺度では「外見」「誠実性」「親しみやすさ」「能力」の<sup>24</sup>項目<sup>4</sup>因子となり、ほめ機能尺度では「関係維持ほめ」「賞賛ほめ」「支援ほめ」の<sup>22</sup>項目<sup>3</sup>因子となった。全ての因子で十分なCronbachの $\alpha$ 係数が得られた。また両尺度とも社会的スキル尺度と相関関係がみとめられたことから、信頼性と妥当性が確認された。

<<ポスター発表>>  
【24号館2階ホワイエ】

(3月15日 10:30-11:45)

日常会話における話題の転換を促す認知的要因

岡本 雅史, 北野 藍子

本発表では『千葉大学3人会話コーパス』を用いて、日常会話における話題の「転換」を促す要因について考察する。分析の結果、談話標識や接続表現等の言語的な側面での記述・説明がほとんどであった先行研究とは異なり、実際の日常会話では話題の転換に認知的な側面が大きく関与すること、および転換の接続表現は省略されることが多いことが分かった。そして、話題を転換させる主な原因は、心理的要因・思想的要因・感覚的要因の3つの認知的要因に分類できると考えられる。この結果から、話題の転換は、話し手の発話内容よりもむしろ自分の興味・関心がある対象への意識が向いたときに生じるという自己指向的傾向が強いと結論づけられる。



<<ポスター発表>> (3月15日 10:30-11:45)  
【24号館2階ホワイエ】

課題遂行対話における相互行為プロセス  
ー英語母語話者と日本人英語学習者はどのようにグラウンディングを成立させるかー

谷村 緑, 吉田 悦子, 仲本 康一郎, 竹内 和広

第二言語における意味交渉に関する先行研究では、概して、対話の中断は学習者の言語能力の低さに起因し、対話を修復するのは母語話者であると捉えられることが多い(Long, 1985)。そのため、母語話者が対話修復のために使用するストラテジーを分類・分析する研究が主流となっている。

本発表の目的は、そのような立場は取らず、言語的に熟達している母語話者と学習過程にある学習者はお互いに自分の役割を果たしており、双方が発話調整をしている (Firth & Wagner 1997) ことを主張する。調査方法としては、Isaacs & Clark (1987)を出発点に、母語話者と学習者 (6ペア) に、ブロックを積む「レゴタスク」(Clark & Krych 2004)を課した。この課題は、母語話者による写真の説明に従って、学習者がレゴブロックを積むというものである。分析の結果、母語話者と学習者は、お互いから得た情報を頼りに発話を変更し、グラウンディングを成立していることが示された。

<<ポスター発表>> (3月15日 10:30-11:45)  
【24号館2階ホワイエ】

ムラブリ語における「男ことば・女ことば」の再解釈  
—変種間の「捻れた」対応から—

伊藤 雄馬

タイ・ラオスで話されるムラブリ語には「男ことば・女ことば」が報告されている。しかし、その数は極端に少なく、また実際には「男ことば」を女性が使うこともあるなど、その存在意義については疑問のままであった。

本稿は、先行研究で調査されたB変種とは別のA変種を調査し、「男ことば・女ことば」について両変種を比較した。その結果、A変種での「男ことば」がB変種では「女ことば」、反対にA変種での「女ことば」がB変種では「男ことば」と、男女が「捻れた」対応をしていることが分かった。本稿は、この「捻れた」対応から、「男ことば・女ことば」とされたものの一部は、実は変種間の差を含意するものであると再解釈する。A変種とB変種の話者は忌避関係にあり、相手側の言葉をタブーとする向きもある。「捻れた」対応を示す「男ことば・女ことば」は、タブーとすべき相手側の言葉を保持するための方策であると捉え直すべきものであろう。

<<ポスター発表>>  
【24号館2階ホワイエ】

(3月15日 10:30-11:45)

フランコプロヴァンス語の再活性化と言語意識  
ーフランスのブレス地方の例ー

佐野 彩

フランコプロヴァンス語はフランス、イタリア、スイスにまたがる地域のマイノリティ言語である。本研究では、フランスのブレス地方の言語運動における人々の言語意識を検討し、再活性化への影響を考察する。主にインタビュー調査で得たデータを質的に分析する。ブレス地方では、地域語は後進性と結びつけられ、フランス語への移行が進んだが、伝統が再評価される中で一定の肯定化が見られ、保存・継承活動が進展した。しかし母語話者に近い世代は、否定的言語意識の残存から若者には無用の言語とみなす上、再活性化を過去への回帰と捉え、再活性化に消極的になる。また固定化された言語観から来る言語純粹主義は、再活性化に肯定的だが、言語能力は高くない人々の言語使用を妨げる。さらに過去と結びつく言語観は若者には懐古趣味に映る。固定化された言語観は肯定的言語意識であっても再活性化につながらず、伝統への肯定感が逆に再活性化を難しくしている。

<<ポスター発表>> (3月15日 10:30-11:45)

【24号館2階ホワイエ】

Using English-as-an-international-language in the workplace:Problems faced by Japanese business people

相川 弘子

English is considered as an international language for global communication (McKay, 2002) and it is widely argued that Japanese business people must be equipped with strong English language skills in this global market. One of those crucial situations is a meeting with native and non-native speaking business partners and colleagues; however, still little is known about what linguistic and non-linguistic problems Japanese business people are facing in such meetings. This study investigates how Japanese business people use English in meetings including teleconferences, and shows what interactional problems both Japanese and foreign business people perceived or did not perceive. The analysis of the interaction interviews (Neustupný, 2003) revealed that various problems relating to the function of meetings and participants' roles and behaviors, especially giving explanations were noted. Moreover, the evaluations made the interviewees reveal that some were unable to see that they were actually the cause of some of the problems.